不登校生徒への対応について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、小学生の時から登校習慣が身につかない、集団活動になじめない、他者の視線に過敏などの理由を抱え、通常登校できない状況が続いている。不登校生徒の中には、家庭への支援が必要な場合もあり、定期的に SSW の訪問支援を受けている家庭もある。

具体的な取組

修学支援委員会【SCFT】<週1回>

管理職・不登校加配教員・特別支援教育コーディネーター・学年主任・生活指導部主任・生活指導部員・SC・SSWで構成し、不登校生徒の状況を密に報告・確認している。

また、必要に応じて、ケース会議を開催 し、緊急性のある案件にもすぐに対応でき るようにしている。

外部関係機関との連携 <適宜>

不登校生徒の状況に応じて、積極的 に関係機関との連携を図る。

- ・小学校(兄弟姉妹関係)
- ・こども支援センター
- ・キッズポート
- 私立フリースクール
- ・その他(SSW→各家庭への支援など)

校内研修の充実

年2回を目途に、不登校対応をテーマ とした校内研修会を実施し、日々の生徒 指導に還元している。

5月24日 講師をお招 きして実施



登校支援サポーターの活用

週3回、午前。特別支援教室に常駐。 別室登校の習慣化を目指している。

必要に応じて、 タブレットを活用 した A I ドリルの 自習を取り入れて いる。



成果

現在、長期欠席の生徒数が2年生5名、3年生7名となっており、いずれも修学支援委員会や家庭連絡、外部関係機関との連携などで、現状を維持しながら別室登校に向けた取組を継続できている。また、1年生においては、現在のところ0名を維持している。

課題

個々の生徒の状況を踏ま えながら、自己肯定感・自己 有用感の向上を図ることを 第一に対応・取組について 検討し、実践に努めること。

校内支援・活用の充実へ

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学2年時に環境の変化や学習の遅れなどから教室で過ごすことへの 拒否感が強くなり、登校渋りが続き、学校に来られなくなった。担任が保護者とこま めに連絡を取り、当該生徒の別室利用が始まった。別室利用を続ける中で、オンライ ン授業に参加するなど、登校状態が安定した。本人も意欲的に学習に取り組むことが できているため、今後も教室復帰に向けた支援を継続していく。

具体的な取組

(1)連絡の徹底

当該生徒が登校し次第、登校サポーターが内線で連絡を行う。職員室前のホワイトボードに名前を記入することで、全

職員が登校状況を把握 できるようになった。 また、給食指導も全職 員で対応している。



(2) 校内の組織連携

週1回の生活指導部会、月1回のSCやSSWも参加する特別支援教育推進委員会等で各学年の不登校生徒の状況を共有し、支援方法を検討している。また、各学年に教育相談担当を位置づけ、SCや登校サポーターとの調整をするなど、組織的な支援にあたっている。

(3) ICT 機器を活用した不登校支援

各学年で「リモート授業用」のクラスルームを作成し、全学年が同じように授業が配信できるようにした。また、実技の授業は配信が難しいため、自習等自由に使える時間として確保し、不登校生徒の学習支援を図った。



(4) 別室対応の環境整備

別室で授業を受ける生徒が増えた時のため、また一人で集中できる環境作りのため、部屋の角にパーテーションを設置した。 配信授業の音量を気にすることなく授業に参加できるようにした。



成果

当該生徒は、以前は学習に消極的だったが、今は意欲的に取り組めている。様々な人と関わる中で自分を成長させ、教室復帰に向けて前向きに努力できるようになったことは大きな成果である。

課題

当該生徒は、2年時の夏以降は教室復帰を目指していたが、継続して教室へ登校することは難しかった。生徒のニーズに応じた支援ができるよう、さらに支援体制を検討し、整備する必要がある。

「校内別室指導の取組」について

不登校生徒の状況

不登校の生徒は複数名いるが、いずれも外部諸機関とつながっており、SC、SS Wと相談後、教室に復帰することを目標に、生活・学習のリズムを取り戻すために、 登校サポーターや教員と午前中に学習や活動を行い、給食後下校している。

具体的な取組

◆校内別室の準備

本校では、不登校生徒の居場所をつく りとして、SCとの相談や外部機関等を 利用している。教室にはまだ戻れない が、学校内で学習を希望する生徒には、 別教室を用意し、少しでも学校生活に近 付けられるようにした。居心地のよい教 育相談室をSCと併用している。生徒が

落ち着いて過ごすこと が学習できるスペース とくつろげるスペース に分かれている。



◆SC、SSW、外部機関との連携 本校では、区のSC、都のSCの3名 体制で組織的な相談が行われている。不 登校生徒のうち、約30名の生徒や保護 者がSCと面談を行い、校内別室指導や 外部機関を紹介し、教室復帰へつないで いる。

◆活動内容

登校サポーターと校内別室で午前中 は自分の課題や提供された教材に取り 組んでいる。適宜、担任やSCと面談を し、個に応じた支援を行っている。具体 的には、文化祭前の取組で掲示物の準 備を教員と一緒に行い、教科の学習を

タブレットで復習した りすることもある。学 習後には、登校サポー ターと給食をとり下校 する。



◆校内別室の整備と運営

特別支援教育コーディネーターを担 当する教員が、SCと生徒、保護者の面

談や校内別室指導 の時間割を作成 し、部屋の整備を 行っている。



成果

担任や登校サポーターが家庭と連携を取ることがで きている。生徒の思いを大切にしながら、課題を解 決しようとする態度を養っている。校内別室指導へ の登校が増えた生徒の欠席日数が減少したことは大 きな成果である。

課題

校内別室指導から教室復帰 までの接続が困難さを感じ ている。今後は生徒の気持 ちを考えながら教室復帰に つなげていきたい。

組織的な支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校3年生であり、中学校1年生から不登校状態が継続している。 不登校の要因は、対人に対する恐怖である。中学校2年生からSCによるカウンセリングを月に2~4回行うようになった。中学校3年生に近付くにつれ、当該生徒に卒業後の進路に対しての意識が芽生え始めている。

具体的な取組

アセスメント(組織的な支援)

週1度の校内委員会(参加者:管理職、 生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、不登校対応教員、各学年教員、 SC、SSW)において、支援の対象と なる生徒の情報の収集・分析・共有を行った(WEBQU の結果の活用)。当該生徒が欠席日数を気にし始めていたことから、人と関わる不安を減少させるための手立てを考え、支援策を提案した。

別室でリモートでの授業参加

校内別室で自分のクラスの各教科や、 学活、道徳の授業をリモートで受けられるようにしている。タブレットの準備や、 担当教員への連絡を不登校加配教員が行っている。授業への参加だけではなく、ク

ラスメイトとの交流 もあり、他者と関わ れる学びの場の提 供にもなっている。



クラスメイトに協力してもらって の"朝活"

クラスメイトと関わる不安を少しでも減少させるため、クラスメイトに協力してもらい、"朝活"(始業前にクラスメイト数名と対象者とで行うレクリエーション)を行った。

家庭との連携

担任を中心に、不登校加配教員が加わり家庭との連絡(原則毎日)を綿密に取っている。

また、年度途中から電話連絡に加えて、 アプリを活用したやりとりを追加し、連 携をとっている。

成果

はじめは、朝学活のみの参加であったが、少しずつ教室にいられる時間や日数が増えた。9月になると月の半数くらい出席できるようになり、10月には修学旅行にも参加することができた。

課題

一日を通して学校にいる日が数日続くと疲れを見せる様子があることから、校内別室や保健室で休憩できる準備を整えることと、心理的サポートを継続してくこと。

不登校生徒の教室復帰を目指した支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校1年生で、入学当初よりクラスになじめるか不安を抱いており、5月の大型連休後から欠席が増えた。当該生徒には、コミュニケーションに強いコンプレックスがあり、不登校の要因となっている。保護者からもSCに相談があり、校内別室登校の希望の申し出があった。支援を継続した結果、当該生徒は、校内別室への登校を継続することで安心して自分の不安を担任やSCに話せるようになった。今後、教室復帰に向けてさらにコミュニケーションの取り方を支援していきたい。

具体的な取組

不登校が生じない魅力ある学校づくり

教職員が「分かる授業」を展開できるよう、年に5回の校内研修を実施している。「授業が楽しい」と思える学校にし、生徒の「居場所づくり」を進めていく。

個々の不登校生徒の支援

共有された情報や協議内容を基に、不 登校対応加配教員と担任が連携して、全 校体制で一人一人の生徒に対応してい る。さらに、進捗状況の情報共有も大切

にしており、欠 席や校内別室登 校、家庭訪問、 電話対応の状況 を可視化し、掲 示板にまとめて 示している。



不登校生徒の対応を 一覧で示した資料

校内別室対応による不登校生徒の支援

登校サポーターと連携した校内別室指導

を実施。毎週3回(月・木・金)を校内別室登校の日として、個に応じた学習活動の補助や社会性を高めるため



の小集団活動を 取り入れている。

校内別室での活動内容を記録する報告書

校内支援体制の強化

毎週金曜日の3時間目に、「校内支援委員会」を設定。参加者は、管理職、各学年担当者等に加え、SC、SSWとなっている。学年から上げられた情報を共有し分析、具体的な解決策について話し合えるよう、企画、運営されている。

成果

学校内外の機関などによる相談・支援などを受けていない生徒数を令和4年度の31%から7%へと大きく減少させることができた。また、登校できるようになった生徒数も増加している。不登校対応加配教員を中心に組織的な対応が構築できた成果である。

課題

不登校出現率の減少は達成できていない。校内別室での対応や様々な支援を、教室への復帰につなげる新たな取組が必要である。

別室登校支援の取り組みについて

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は学力もあり、生徒会の役員として活躍していたが、2年生から集団の中で生活することに違和感を覚え、それが腹痛などの身体の症状に現れ、2年生の後期から登校できなくなった。本人、保護者のSCのカウンセリング、担任との面談を通して、周りを気にせず一人で学習に集中できる別室登校の提案を受け入れた。

具体的な取組

1 別室の環境整備

まず、別室の名称を「うめこぶしルーム」とし、教室復帰の意味をもたないものに変更した。また細かくパーテー



ションで区切り 一人ひとりのプラ イバシーが守られ るようにした。

2 オンラインによる授業参加

別室を提案するにあたってリモートに よる授業が可能であることを本人に伝え



てあった。本人が別 室を受け入れるにあ たって、大きな判断 基準になったと思わ れる。

3 教員以外とのコミュニケーション 区で配置をしている生活指導員・こど も支援センターげんきに要請をし、派遣 していただいた登校サポーターに、生徒 の登校時に別室で待機できるようコー ディネートした。指導的な立場の方では ない人との何気ないコミュニケーショ ンがとれる様に配慮した。

4 SC によるカウンセリングの充実

別室の隣がカウンセリングルームにあたり、SCの勤務日にカウンセリングのない時間に気軽に別室に行き、登校している生徒と話ができるようにした。会話の中から心の状態を把握し、生活指導部会で情報の共有ができた。

成果

もともと学習意欲が高い生徒である。別室でオンライン授業に参加できることは、本人にとって最適な環境であり、集中して取り組んでいた。現在3年生になり、教室復帰には至ってないが、通信制の高校を進路選択し、次のステージに向けて、前向きに頑張っている。

課題

不登校になる要因には学習についていけないこともある。別室で何を取り組むかは一人一人違うことに配慮しなければならない。